



『自然に生きる』 ~不要なものは何ひとつ持たない

辰野 勇 著

KADOKAWA (角川新書)

2025/05 208p 1,012円（税込）

1. 24時間の自然を満喫する
2. 不要なものは何ひとつ持たない
3. 山には文学がある
4. ただ「一步先」へ
5. 「なんとかなる」
6. 「好き」を仕事にする
7. アウトドア義援隊

【イントロダクション】

日本のアウトドアメーカーの中でもトップクラスの知名度を誇るのが「モンベル」だ。1975年に大阪で創業、機能性に優れた商品の開発を行い、国内外におけるアウトドア文化の拡大を支えてきた。2025年に創業50年を迎える。近年では被災地支援活動でも知られる同社を牽引してきたのが、創業者の辰野勇氏である。本書では、登山家であり、企業リーダーでもある辰野氏が、山やキャンプ、ビジネスでの経験を振り返りつつ、自然と向き合う中で培ってきた自身の行動哲学、ものづくりへの思いなどを語っている。例えば物事が意図した通りに運ばない時、辰野氏は「失敗」ではなく「不都合」があったと考えるという。そうすることで前進を続けられ、同時に人生の醍醐味も感じられると説く。なお本書は、2020年刊行の『自然に生きる力 24時間の自然を満喫する』(KADOKAWA) を加筆修正・再編集したもの。著者の辰野氏は株式会社モンベル代表取締役会長兼CEO。1969年アイガー北壁日本人第二登（当時世界最年少）を達成。日本初となる身障者カヌー大会を開始（91年）するなど社会活動にも尽力している。京都大学特任教授、天理大学客員教授。

●ものづくりに対する2つのコンセプト

モンベルは2つのコンセプトで商品開発をしています。そのひとつは、「Light & Fast」（ライト&ファスト／軽量と迅速）というものです。アウトドアの装備で重要なのは、「軽量かつコンパクト」であること。野外の環境では、迅速に行動することが安全につながります。

「Light & Fast」の原体験は、アイガー北壁（ヨーロッパ・アルプス三大北壁のひとつ）でした。1グラムでも荷重を減らしたかったので、登攀にあたっては、必要最低限の装備に抑えるように心がけていましたが、それでも3分の2ほど登ったあたりから、一気に頂上を目指すことを覚悟して、さまざまなものを持てることにしました。

カメラは、フィルムだけ抜いてボディを捨てました。退去用の予備のロープも捨てました。食料も捨てました。極限の状況から一刻も早く抜け切るために、命をつなぐ最低限のもの以外、すべてを捨てる覚悟を決めたのです。

当時の登山道具は、かさばるし、重いし、防水性や耐久性にも劣っていました。しかし以前、総合商社の繊維部に在籍していたとき、防弾チョッキに使われる高強力繊維「ケブラー」や、消防服に使われている難燃繊維「ノーメックス」といった特殊素材の存在

を知りました。そこで、「こういった繊維を使えば、もっと軽量で、コンパクトで、快適で、安全な山の道具がつくれるのではないか」と考え、ものづくりの会社を立ち上げる決意をしたのです。

モンベルの最初のヒットは、スリーピングバッグ（寝袋）です。アメリカのデュポン社が開発したポリエステル繊維「ダクロン・ホロフィルII」という新素材を使い、従来の寝袋よりも格段に軽くてコンパクト、保温性が高く、速乾性の高い製品を開発しました。この寝袋の登場によって、「Light & Fast」というモンベルのコンセプトは、多くの登山者から支持されるようになったのです。

モンベルが掲げるもうひとつのコンセプトは、「Function is Beauty」（ファンクション・イズ・ビューティー／機能美）。余計なものを取り除き、機能を追求したデザインには、独特的の美しさがあります。

たとえば、「ストームクルーザー」はモンベルの代表的なレインウェアです。通常のレインウェア（ジャケット）は、前身頃、後ろ身頃、両袖、襟、フードなどのパーツに分かれています。しかし、これらのパーツを縫い合わせると、縫い目が浸水の原因になります。そこでモンベルでは「K-Mono（ケイモノ）カット」という独自の裁断方法で縫製箇所を減らし、防水性と軽さを実現しています。

この方法は、日本の伝統文化である「着物」からヒントを得たもので、1枚の生地からウエアを縫製しています。縫い合わせてあるのは、胸の下と袖下だけです。縫い糸も少なくなった分、軽量化にも成功しています。徹底して一切の無駄を省き、使いやすさや素材の特性を突き詰めたものにこそ美しさが宿る。それがモンベルのものづくりの思想です。

●孤独や不安に耐えて夜を過ごし、平常心を身につける

中学時代、私は足しげく金剛山（＊奈良県と大阪府にまたがる山）に通いました。金剛山周辺にはキャンプ場がなかったので、沢筋の適地を選んでテントを張りました。キャンプを始めたころは、陽が落ちて人気がなくなると、自分が取り残されたような不安を覚えました。暗闇と静けさに押しつぶされそうになりながら、朝を待つ。自分の弱さと未熟さを思い知らされる時間でした。

不安に耐えて迎えた朝は、感動的です。空気が澄んでいて、爽快でした。コントロールできない自然の中で、自分の心をコントロールする。暗闇を越えた先に、またひとつ強くなった自分がいました。

かつて、マイナス30度の過酷な環境下でビバーク（＊しっかりしたテントを使わず、外気にさらされる状態で休息や宿泊すること）を余儀なくされました。眉も凍るほどの寒さの中、待ち望むのは太陽です。ビバーク中、極度の疲労状態から眠気に襲われ、ついウトウトとストーブの前で眠り込んでしまいました。

ハッと目が覚めたとき、身につけていた手袋とダウンジャケットに火が移り、燃えていました。ツェルト（軽量の簡易テント）の中を羽毛が舞っているのを見て、一瞬「鶴小屋かな？」と錯覚を起こすほど（笑）、心身ともに追い込まれていたのです。

それでも夜が明け、太陽が上がってくると生気が戻ってきます。滞っていた血流が勢いよく流れ出すような活力を覚えました。あれほどつらくて、あれほど不安だったのに、太陽に包まれたとたん、希望に満たされる。

厳しい状況に追い込まれ、生死の境に立たされながら、それでも私の心が折れなかつたのは、「耐えて待てば、必ず日が昇る」、そして「日が昇れば、新たな希望が生まれる」ということがわかっていたからです。

山は、心を強くします。私は山に身を置き、「暗闇の中でひとり朝を待つ」という経験をするなかで、「平常心を保てる心の強さ」を身につけた気がします。

●思い通りにいかないことは「失敗」ではなく「不都合」

1979年2月、私はオーストラリアとニュージーランドへ飛びました。その年は暖冬で、冬用の商品が思うほど売れない。なんとかして売りさばく方法はないか……。ふと思いついたのが、「南半球でセールスをすること」でした。「南半球はこれから冬が到来するので、需要があるのでは」と考えたのです。

すぐにチケットを手配して、オーストラリアのメルボルンに向かいました。訪ねるあてはまったくなかったので、電話帳を開いてアウトドア用品店にかたっぱしから電話をかけ、アポイントメントを取り付けました。どのショップも好意的でしたが、オーストラリアでは輸入関税が70%（当時）もかけられるため、値段の折り合いがつきませんでした。シドニーでも結果は同じでした。その後はニュージーランドへ渡ったのですが、結果は同様でした。

成果は挙がりませんでしたが、この経験を通して、オーストラリアの商習慣を学ぶことはできました。また、出張先のオーストラリアで買った土産用の世界地図は、日本のそれとは違って、南極が上に、北極が下に描かれています。それだけで、地球の見え方がまったく違います。

その後、アメリカ、西ドイツ、オーストラリア、イギリスに対して本格的な輸出を開始。1990年には「モンベル・ヨーロッパ」、1991年には「モンベルUK」「モンベル・アメリカ」を設立。モンベルが世界に向けてメッセージを発信することができました。

登山でもカヌーでもビジネスでも、思い通りにいかないこと、狙い通りの結果にならないことは、山ほどあります。でも、私にとってそれは、「不都合」なのです。「失敗」と捉えると、その時点で完結してしまいます。ですが、「不都合」だと解釈すれば、前に進むことができます。不都合を是正・修正・修復すればいいからです。

たとえば、崖の上にユリの花を見つけたとします。思慮深い人は「ユリがほしい」と思っても、「でも、あの崖に行く途中には川があるだろう」「あの岩場は登れないだろう」と推測して、「手にしたい」という気持ちに蓋をする。

私は、川に阻まれたら、（＊対岸にかける）「丸太」を探します。丸太がなければ、遠回りして浅瀬を探せばいい。丸太が見つからなくても、それは「失敗」ではありません。「丸太がない」という不都合が生じただけ。だとすれば、その不都合を解消する別の方法を考えればいいことです。

一見違う方向に進む私を見て、他人は、「あきらめた」と思うかもしれない。ですが私の中では、そのユリに向かって歩みを進めることを考え続けているのです。遠回りすることになっても、その目的への道を探すことが人生の醍醐味です。さらに言えば、結果的に目指すものが手に入らなくても、「そこへ向かって歩き続けたプロセス」にこそ価値があり、人生そのものだと思います。

※「＊」がついた注および補足はダイジェスト作成者によるもの

コメント：1995年1月に発生した阪神・淡路大震災の際、モンベルはテントや寝袋などを被災者に配って回ったという。アウトドア用品の有用性を感じつつも一社での支援に限界を覚えた辰野氏は、アウトドア愛好家や関連企業に声をかけ協力を募った。そうして生まれたのが「アウトドア義援隊」というボランティア組織だ。以降、この組織は地震、豪雨、台風などで被災した地域や人々の支援を国内外問わず続けてきた。自然災害のリスクが高まる今日、コントロールできない状況の過ごし方を知る存在からは、物心両面で学べることが多そうだ。